

平成 26 年 5 月 24 日

第 1 号議案

平成 25 年度 事業報告について



公 益 事 業

公 1

1. インフォメーション・情報発信事業

(1) ビジター向け施設でのインフォメーション事業

知床自然センター、羅臼ビジターセンター、ルサフィールドハウス、知床五湖フィールドハウスの4拠点において、自然情報収集を積極的に行い、旬の情報を来館者に提供することによって、知床での体験をより快適、かつ楽しいものにしていただくよう努めました。

(1) 知床自然センター

フレペの滝や知床五湖、羅臼湖などの観光地について、最新情報を来館者に紹介する手作り展示を作成しました。フィールド情報を積極的に収集し、情報更新することで、知床での自然散策をより楽しんでいただけるよう努めました。

(2) 羅臼ビジターセンター

周辺の自然情報やヒグマに関する注意喚起情報、野生動物接する際のルールとマナーをインフォメーションにてお伝えしています。また、展示などを活用して、通常 of 自然解説により深みを持たせたミニレクチャーを実施しました。

(3) ルサフィールドハウス

知床岬など半島先端部に立ち入る際のレクチャーを行うのがルサフィールドハウスの重要な機能の一つです。レクチャーを受けるとともに、クマスプレーやフードコンテナのレンタルを利用する人も多くなってきており、フィールドに入る際のヒグマ対策の必要性が浸透してきている手ごたえを感じています。

(4) 知床五湖フィールドハウス

知床ガイド協議会と協力し、ガイドツアー情報の充実や当日のツアー参加希望者への受付体制を整備する等、利用者サービスの向上に努めました。また、地域で取り組む知床ヒグマエサやり禁止キャンペーンにも協力し、展示の作製、ポストカードの配布等を行いました。

(2) 地域向け財団活動紹介・情報提供

知床財団の活動に対する理解と協力を得るために、地元やその他の地域に向けて財団活動紹介を行っています。地元の斜里・羅臼両町民の方向けには、知床の旬の自然情報や当財団の活動・イベント情報をお知らせする「知床財団だより」を発行しています。本年度は2ヶ月に1回、斜里・羅臼両町の広報誌に折り込みました。

(3) ホームページによる広報活動

財団の活動に対する理解と支援の輪を広げる「伝える活動」の主軸として、ホームページでの情報発信を継続して行っています。

(4)機関誌の発行及びパンフレットの作成

賛助会員向けの会報誌である知床自然情報紙「SEEDS」を年 4 回発行し、会員の皆さまや関係機関の方に発送しました。

(5)道東自然系施設での情報提供

毎月各施設の自然情報を共有して発信するなど、道東にある各施設と連携して効果的な情報発信を行っています。

2. 環境教育等推進事業

(1)学校向け

地域が支える世界遺産・知床を目指して、知床の自然とその自然に携わる人々の活動をより深く知ってもらう機会を様々な形で地域に提供しています。

斜里町

ウトロ小中学校全校生徒を対象にクマ授業を計 3 回実施しました。また冬に小学校 1～6 年生を対象とした環境教育授業を行いました。

平成 25 年度はウトロ小中学校の他に、峰浜小学校、以久科小学校の各全校生徒を対象としたヒグマについての授業を行いました。

羅臼町

羅臼町では、中学校・高校一貫教育のカリキュラムとして継続して行っているヒグマ授業を、計 5 回実施しました。中学 1 年生、中学 3 年生、高校 2 年生の全生徒を対象に、各学校に出向いて授業を行っています。また、今年度は羅臼町内の全幼稚園でのヒグマ授業も初めて実施しました。

羅臼町公民館などと共に羅臼町内の小学生を対象にして実施している知床キッズ（羅臼町ふるさと体験教室）は、5 月から 2 月までの間に計 10 回の講座を企画しました。

(2)一般向け

知床財団が行うヒグマ対策活動に対し、住民の理解と協力を得ることを目標に、職員とウトロ住民が直接意見交換をする「クマ端会議」と題した場を設けました。ヒグマ対策について日ごろ抱いている疑問や質問など、ウトロ住民の生の声を聴くことのできる機会となりました。また、知床の自然のために何かしたいという思いや気持ちを持っている方を対象に、森づくり作業や普及活動などをお手伝いいただくという形でボランティア活動の場を提供しています。今年度末でのボランティア登録者数は 152 名、その内の 41 名の皆さんが各種作業に参加いただき、総活動日数は 64 日間、延べ参加人数は 107 人となりました。

また、インターンシップ（就業体験）の受け入れを行い、主に野生動物や環境保全を専攻する全国の学生が、夏冬合わせて 12 機関より 20 名が知床で様々な体験をしました。

(3)来訪者向け

知床自然センターではゴールデンウィークや夏休み期間中、知床の自然の魅力や知床が抱える問題、知床財団の活動などについて、本物の骨格標本や毛皮などの小道具を使いながら職員が解説するミニレクチャーを 44 回実施し、668 人の参加者がありました。また、地域で取り組む知床ヒグマエサやり禁止キャンペーンの一環として、ダイナビジョン館内でキャンペーン企画実行委員会が製作した DVD を上映し、その後スタッフが野生動物との共存についてレクチャーをしました。このレクチャーには 1,706 人の方に受講いただきました。

公 2

1. 知床自然センターの管理運営事業

知床自然センター及び周辺施設の維持管理、映像展示館（ダイナビジョン館）の運営と料金徴収等の業務を行いました。平成 25 年度の知床自然センター入館者数は 154,426 人で、映像展示館入館者数は 17,513 人でした。

2. 知床自然教育研修所の管理運営事業

ボランティアやインターン、外部研究者が活動する際の拠点となる知床自然教育研修所の維持管理を行いました。今年度は、外部研究者やボランティア活動参加者を中心に 1,318 人泊の利用があり、570,000 円を施設利用料金として徴収しました。

3. しれとこ 100 平方メートル運動ハウスの管理運営事業

「100 平方メートル運動の森・トラスト」運動の歴史と活動内容を展示し、より多くの人々に運動の趣旨を伝え、運動参加者の増加に寄与しました。

4. 知床五湖園地管理運営事業

知床五湖レストハウスは H22 年度に廃止されましたが、引き続き園地内の水道施設の維持管理の他、ヒグマに関わる安全管理およびオートキャンプによるゴミなどの散乱防止のため、町道知床五湖道路の夜間閉鎖業務等の園地管理業務を行いました。

5. 羅臼ビジターセンター管理運営事業

環境省・羅臼町と協力して施設管理を実施しました。年度の羅臼ビジターセンターの来館者数は 34,481 名で、前年比 97.7%でした。例年開催している自然観察会を 4 回、特別展示を 7 回開催しました。自然観察会には羅臼町民を中心に各回 10 名前後の参加者があり、好評を得ています。

6. 世界遺産関連施設管理運営事業

ルサフィールドハウスの管理運営を行いました。本年度も、4月1日から10月31日及び2月1日から3月31日に開館し、来館者数は、6,464人で、前年比は87.7%でした。展示については、新たな情報を盛り込んだものに更新するなどの工夫を行っています。

公3

1. 独自調査研究事業

科学的な知見をもとに、知床でのヒグマ対策をはじめとする野生動植物の保護管理活動や、国立公園の適正な利用方法の検討に役立たせることを目的とし、知床の自然を対象とした継続的な調査活動を実施しました。

(1)知床国立公園の保護と利用の調和に関する調査

よりよい公園利用のあり方を目指し様々な協議や試行事業に参加し、公園利用の適正化を検討するためのデータ収集を行っています。適正利用・エコツーリズム検討会議（世界遺産科学委、利用適正・エコツーリズムWGと地域連絡会議、利用適正・エコツーリズム部会の合同会議）に積極的にに関わり、知床全体のエコツーリズム戦略の策定に参画しています。

(2)エゾシカ個体群の動態に関する調査研究

エゾシカ越冬数の増減を把握するため、斜里町真鯉地区での日中カウント調査を冬季に計7回行いました。シカの確認頭数は3月中旬が最多となり、472頭でした。最大確認頭数は平成23年度が752頭、平成24年度が517頭でしたので、同地区のシカは依然高密度状態を維持していると考えられます。

(3)知床の生態系の保全・復元に関する調査検討

水域における生物群集モニタリング業務として、深層性生物調査、などを行いました。また、サケ科魚類調査として、魚道が設置された羅臼町のサシルイ川とチエンベツ川でサケ科魚類の遡上数・産卵床数を計数し、改良効果について調べました。

(4)ヒグマの生態等に関する調査業務

幌別―岩尾別地区ではヒグマのメス2頭を箱ワナで生体捕獲し、GPS測位機能を持つ発信機をつけて行動追跡を行いました。また、岩尾別川流域に頻繁に出没していたヒグマ3頭について、麻酔銃での組織採取を試み、遺伝子の分析が進められています。ヒグマが数多く生息している斜里町ルシャ地区において、直接観察と写真記録での個体識別と、体毛や体組織の採取による血縁関係推定を行いました。なお、この調査は知床博物館および北海道大学と共同で行っています。

(5)希少猛禽類生態調査業務

オジロワシの繁殖状況および冬期のオジロワシ・オオワシ飛来状況の長期変動傾向を把握するため、知床半島全体の繁殖状況や羅臼側の冬期飛来数に関する調査を継続して実施しました。また、知床のオジロワシの繁殖状況を調査する人々が集まって形成されている「オジロワシ長期モニタリンググループ」の事務局も引き続き担い、情報の集約と会議を運営しました。

(6)海棲息哺乳類生態調査業務

冬期に羅臼沿岸にやってくるトドを対象として、陸上調査定点からのカウント調査を継続しました。平成 25 年度冬期の最大確認頭数は、1 月 1 日の 110 頭でした。従来と同様に、中部千島生まれの標識個体が多数確認されました。2013 年度はメス成獣群の来遊が例年より 2 週間以上早く、このことが秋鮭定置網などでの漁業被害増加につながった可能性が考えられました。

2. 斜里町及び羅臼町におけるヒグマ・自然環境管理対策事業**(1)ヒグマ対策業務**

人とヒグマの軋轢低減を目的として、斜里・羅臼両町内のヒグマに関する危機管理対策（出没情報の収集や追い払い、ヒグマを誘引するシカ死体などの回収、電気柵の管理、普及啓発活動など）、出没対応および駆除を要する対応時の猟友会との連携などを実施しました。

(斜里町)

平成 25 年度のヒグマ目撃件数は 745 件、大量出没が発生した前年度の半数以下となり、対策活動も 592 件と前年度の 6 割以下でしたが、2005 年度から 2011 年度までの目撃、対応件数からみると平均的でした。ヒグマによる人身事故は発生しませんでした。国立公園内では特に岩尾別川沿いにおいて、人を恐れない特定個体が頻繁に目撃され、写真撮影目的の利用者の危険な状態が常態化し、困難な対応を強いられました。公園外では、ウトロ地区の国設野営場へヒグマが侵入し、利用者を一時避難させた状態で有害捕獲するという極めて危険な事例がありました。また、農地では作物被害が各地で発生し、計 7 頭が有害捕獲されました。

(羅臼町)

平成 25 年度のヒグマ目撃件数は 104 件、対策活動は 107 件でした。どちらも前年度の約 3 分の 1 以下になりました。有害捕獲は 3 頭で、過去最多を記録した昨年度の 45 頭から激減しました。特筆すべき事例としては、4 月に羅臼町中心部、役場付近をヒグマが横断したことが挙げられます。また、3 月には、冬ごもりから目覚め、活動を始めたヒグマが住宅地に出没して有害捕獲されました。3 月にヒグマが捕獲されたのは、1990 年に春グマ駆除が行われなくなって以来の出来事となりました。

(2)自然環境管理対策業務

自然環境保全のためのパトロール、普及啓発、傷病鳥獣の受け入れ、野生生物の生息調査および保護管理業務を両町と連携して実施しました。

(斜里町)

ゴミの不法投棄は23件あり、多くは食品の包装や容器などでした。国立公園内の岩尾別地区では残飯の入った多数の弁当容器が段ボールに詰められた状態で投棄されるなど、悪質なケースも確認されました。サケ・マスの遡上シーズンになるとフンベ川や遠音別川などの河口付近の駐車帯に車内泊をする釣り人が増え、ゴミや糞尿の放置が問題となったため、注意看板を設置しました。

野生鳥獣死体の処理件数は31件あり、約半数がエゾシカでした。海獣（アザラシ、トド、オットセイ）の処理件数は5件と例年よりやや多い状況でした。また、希少種ではオジロワシ1羽の死体を真鯉の海岸で回収しました。傷病鳥獣は12件対応しました。春先に衰弱したタヌキやゴマフアザラシの幼獣の保護が相次ぎました。多くは回復状況をみて山野へ戻しましたが、収容後に死亡してしまうケースもありました。ゴマフアザラシのうちの1頭は、紋別とつかりセンターへ移送され、学術調査のため発信機が装着されオホーツク海へ放たれました。

(羅臼町)

傷病鳥獣の対応は48件ありました。希少鳥類のオオワシとオジロワシへの対応は各3件、計6件ありました。また、特定外来生物に関する情報収集や捕獲作業を行いました。アライグマの目撃情報は2件ありましたが、捕獲には至りませんでした。エゾシカのライトカウント調査は、春期と秋期に各5回、ルサー相泊地区で継続実施しました。町内各地区で実施した計27回のパトロールでは、路上などに不法投棄された食品系ゴミを複数回発見、回収したほか、国立公園利用者の指導も随時実施しました。

3. 野生生物管理事業

(1)知床国立公園・国指定知床鳥獣保護区における利用の適正化と野生動物との共生を推進する業務

知床国立公園および国指定知床鳥獣保護区における、ヒグマの出没状況の把握やヒグマ出没時の現地対応、傷病鳥獣の保護収容や希少動植物の盗難防止のための監視活動等を実施しました。6月から9月にかけての70日間、巡回員1名が国立公園内をパトロールし、自然保護監視や公園利用者への普及啓発活動を行いました。当パトロールにより、ヒグマが停車中の車を覗きこむといった緊急性の高い情報を随時ヒグマ対策スタッフへ連絡することが可能となり、効率的な対策へ大いに役立ちました。

(2)外来生物の調査・対策業務

知床岬地区では特定外来種であるセイヨウオオマルハナバチの駆除作業を6～9月に4回実施し、計80頭を捕獲しました。また、合わせてアメリカオニアザミの刈り取りも分布抑制のために行いました。ウトロ地区ではセイヨウオオマルハナバチの営巣地探索を7～8月に計3回実施しました。うち1回については、啓発イベントとして地域住民とともに探索作業を行いました。羅臼地区では、7～9月に相泊～観音岩における海岸線でアメリカオニアザミの駆除を実施しました。これまでの鎌やハサミを用いた駆除方法では、花茎を再生させて繁殖する可能性があることから、根から引き抜く方法で約15,000個体を開花前に除去し、同区間における同種の繁殖を防止しました。

(3)エゾシカ生息密度操作関係業務

エゾシカが植物を食べることによって自然植生に大きな影響を受けている各地区において、自然植生の回復を目指し、エゾシカの捕獲及び捕獲手法検討を行っています。囲いわなを5基設置稼働し、シャープシューティング（道路を閉鎖しての銃捕獲）を2か所で行ったほか、知床岬での大型仕切柵を利用した巻狩りで捕獲しました。また、今年度岩尾別台地の草原へ新たに設置された大型仕切柵での捕獲も行いました。初冬に雪が少なくエゾシカの越冬地への集結が遅れたことや2月下旬の大雪による除雪をはじめとしたわなの維持管理など、様々な難題に直面しましたが、囲いわなで279頭（岩尾別：35頭、幌別：83頭、ウトロ：35頭、ルサ：10頭、相泊：116頭）、シャープシューティングで85頭（ルサ - 相泊：77頭（春34頭、冬43頭、岩尾別：春6頭、冬2頭）、知床岬での巻狩りで19頭、岩尾別大型仕切柵で44頭の計427頭を捕獲しました。

4. 遺産地域調査事業**(1)エゾシカの採食による植生への影響調査業務**

シカ捕獲事業が実施されている知床岬地区をはじめとする3地区においては、シカ捕獲の効果検証のための植生回復状況調査を実施されています。財団では幌別・岩尾別地区、ルシャ・相泊地区の調査をサポートしています。

(2)エゾシカの個体数・行動範囲のモニタリング調査業務

知床半島の各地区で行われているエゾシカ捕獲事業の効果を検証するために、ヘリコプターで飛行し、上空からエゾシカの越冬数をカウントする航空カウント調査を実施しました。

5. 科学委員会等運営事業

(1)科学委員会運営業務

知床世界自然遺産地域を適切に管理するために、科学的な見地からの行政への助言が科学委員会会議やその附属会議によって行われています。当財団は科学委員会(7/30 斜里町、2/27 札幌市)の運営事務局として日程調整、会場準備、資料・議事録の作成などを担いました。

(2)エゾシカワーキング会議運営業務

知床世界自然遺産地域科学委員会のワーキンググループの一つで、「知床半島エゾシカ保護管理計画」を検討するために専門家で構成されるエゾシカ・陸上生態系ワーキング(6/24、9/29ともに 釧路市)の運営事務局として日程調整、会場準備、資料・議事録の作成などを担いました。

6. 自動車規制管理運営事業

カムイワッカ地区は、マイカー規制期間と自由通行期間が交互に切り替わる利用体制となり、現地では様々な混乱があり調整が必要でした。同地区で行われているマイカー規制の現地連絡調整業務を自動車利用適正化対策連絡協議会から受託し、新設された五湖フィールドハウスを拠点に、運営の円滑化のためにバス会社や各地に配置された警備員や巡視員との連絡調整、利用状況の調査や利用者への情報提供、ヒグマ出没時の連絡整理、負傷者への対応などを行いました。

7. 知床エコツーリズム総合推進事業

よりよい公園利用のあり方を目指し様々な協議や試行事業に参加しています。適正利用・エコツーリズム検討会議(世界遺産科学委、利用適正・エコツーリズムWGと地域連絡会議、利用適正・エコツーリズム部会の合同会議)では、知床エコツーリズム戦略が合意され、地域提案型の利用のあり方やルール作りの仕組みが確立されつつあり、私たちもこうした取り組みに参画しています。エコツーリズム戦略の提案に基づき、昨年度に設置された部会全ての議論に参加しました。

8. 知床五湖関連業務

知床五湖では平成23年より自然公園法の利用調整地区制度に基づく新しい利用システムが導入され、当財団は制度運営の要となる指定認定機関(環境大臣指定)として制度全体の運用を担いました。制度開始3年目となる平成25年度は、ヒグマの出没も少なく、立ち入り者数が7万人弱と過去最高を記録しました。また、ガイドツアーの参加者数も8,946人と大幅に増加し、制度の理解と支持が広がりつつあることを実感する年となりました。

公4

1. 森林再生事業

森づくり作業は、5年毎の回帰作業方式としています。平成25年度は、4順目の回帰作業の1年目に当たり、幌別台地の第1区画を中心に作業を行いました。

春から夏にかけて、苗畑での除草や苗木の根づくりを行い、秋には育てたイタヤカエデなどの苗木約200本を防鹿柵の中に植えました。また、樹高5～10メートルにもなる大型苗の移植や老朽化した防鹿柵の改修作業などを進めました。

2. しれとこの森交流事業

森づくりの現場と運動参加者をつなぐ交流事業では、「第34回知床自然教室」（7月30日～8月5日、参加者29名）、「第17回森づくりワークキャンプ」（10月30日～11月4日、参加者15名）、「第17回しれとこ森の集い」（10月20日、参加者85名）の企画・運営を行いました。

3. 森林再生専門委員会議運営事業

森づくり作業の方針や計画は、動植物の専門家と地元の有識者で構成される森林再生専門委員会議の場で議論が行われその方向性などが定められています。

11月に開催した森林再生専門委員会議では、4年後の2017年には本格的な森づくりの開始から節目の20年目を迎えることから、今後4年間でこれまでの20年間のまとめを行っていくこと、そして、次の20年間の方針と目標を策定していくことが確認されました。

4. 運動地広報企画事業

100平方メートル運動の広報誌『しれとこの森通信 No.16』（A4判カラー24ページ）の企画・編集作業を行いました。なお、同号はページ数を増やし、5年毎の回帰作業報告号として発行しています。また、当財団ホームページのブログにて、日々の森づくりの様子を発信しているほか、「しれとこ100平方メートル運動ホームページ」（斜里町）の全面リニューアルを行いました。

5. しれとこ100平方メートル運動地保全・公開システム検討事業

運動の趣旨に賛同する企業や団体、教育機関を対象に、運動地を歩きながら100平方メートル運動や開拓の歴史などを紹介し、そして実際の森づくりの作業も経験する運動地公開プログラムを行いました。地元の斜里高校をはじめ、東京都立南多摩中等教育学校の生徒や日本赤十字北海道看護大学の学生など353人が、知床の森を訪れ、運

動と森づくりに触れました。

また、4泊5日の合宿イベント「知床森づくりの日」を計3回開催しました。計15名の参加があり、作業に汗を流しました。冬期は知床自然センター周辺に「スノーシュー・歩くスキーコース」を設置し、利用者に運動と森づくり作業を紹介する地図を配布して普及と公開に努めました。

収 益 事 業

収1：収益事業

I. 販売・有償貸出業務

オリジナル商品の開発

当財団の活動を広く知ってもらうことを目的に、オリジナル商品の開発を行いました。今年度は、オリジナルエコボトル 500ml の新色とオリジナル軍手の新色、希望の多かったオリジナルエコボトルの1リットルを新たに作成しました。また新商品の知床かばん、職員撮影の写真で作ったオリジナルカレンダーを作製、販売しました。

レンタルサービス

夏季を中心に、知床自然センターで長靴・双眼鏡の有料貸出を実施し、のべ831人の方にご利用いただきました。来館者の少なくなる冬季には、入館促進および来館者の満足度向上のために株式会社ユートピア知床と共同で、長靴・スノーシューの無料貸出を行い、のべ1,425人の方にご利用いただきました。

オンラインショップの運営

オンラインショップ「コムヌプリ」の運営を行い、近年度は133件の売上がありました。また、知床財団個人会員に登録していただいた方は、2013年度は、82口（600,000円、うち個人終身会員2口、個人年会員新規登録17口、個人年会員更新登録63口）あり、オンライン上での手続きが徐々に増えてきています。

ヒグマ撃退スプレー・フードコンテナの貸出

知床自然センター、羅臼ビジターセンターおよびルサフィールドハウスで、ヒグマ撃退スプレーとフードコンテナの有料貸出を行いました。また、羅臼岳登山道入り口にある木下小屋へヒグマ撃退スプレーの貸出を委託し、希望する登山者に利用していただきました。今年度は、ヒグマ撃退スプレー197件、フードロッカー9件を貸出しました。貸出の際には、契約内容や使用方法、ヒグマとの危険な遭遇を回避する方法についてスライド画像を用いて20分程度のレクチャーを行いました。今後もヒグマ撃退スプレーやフードコンテナの重要性を利用者に広く呼びかけていきます。

Ⅱ. 研修実習受入業務

知床には、豊かな自然のみならず、ヒグマと共存するための努力、自然を守るための各種制度を整えてきた歴史、数百年の時の流れを必要とする森づくり活動など、自然と人間が共存するための様々な取り組みがあります。そして知床にはそれらを体験できる現場があります。

知床財団が担う野生動物保護管理、調査研究や公園管理の実績を反映した研修プログラムとして、北大獣医学部生や酪農学園大学環境システム学部生の研修などを受け入れました。他にも、道内外の各種団体からの講演以来、知床でのレクチャー対応、行政視察対応を通じて、知床の価値を広く伝える活動を行いました。

他1：その他の事業

I. JBN業務

日本クマネットワーク（JBN）からの受託業務として、JBN 会員向けニュースレター「Bears Japan」の発行・発送、「ヒグマとの遭遇回避と遭遇時の対応に関するマニュアル」の発行・販売、JBN ホームページの運営管理を行いました。

日本クマネットワークは、個人や地域ごとの単独の活動だけでは難しい全国レベルの諸問題や国際問題に関し、必要に応じて社会に対して働きかけを行い、人とクマのより良い関係を構築する活動を行っている NGO 組織です。会員は専門家やクマに関心を持つ一般市民、およそ 370 名で構成されています。JBN 会員向けニュースレター「Bears Japan」は計 3 回、計 1060 部を印刷発行し、会員に向けて発送しました。また、「ヒグマとの遭遇回避と遭遇時の対応に関するマニュアル」については、店頭および通信販売を通じて計 51 部を販売しました。ホームページについては、日常的な掲載内容の更新を中心に、幅広い運營業務を JBN 事務局と連携して実施しました。

法 人 会 計

法1：財団法人管理運營業務

I. 財団法人管理運營業務

理事会は、5月に第1回理事会を開催し、平成25年度事業・決算報告及び、特定費用準備資金積立について審議しました。10月に第2回理事会、12月に第3回理事会を開催し、賛助会員の入会承認について審議しました。3月には第4回理事会が開催され、平成26年度事業計画・予算等について審議し、年4回開催しました。定時評議員会は5月に事業・決算報告について審議しました。他、代表理事と事務局の年2回以上開催

が義務づけられている運営会議を9月と3月に開催しました。その他、理事会評議員会の開催時に事務局会議を行い、3月には今後5年間の「中期的経営収支の試算」を作成しました。